

## 環境と戦争

写真は前にレポートでも紹介したが、2012年3月の日本環境会議島根大会における原田正純先生の会場発言である。「今回の福島原発事故による放射能汚染の問題は、水俣病よりはるかに深刻である」と、私たちに問いかけるように発言されたのが忘れられない。先生が亡くなる3カ月ほど前だ。

2007年10月刊行の『環境と公害』巻頭のリレー・エッセーに原田先生が表題のテーマで寄稿されている。戦争と原発事故への「関心」から再読したので紹介したい。



20世紀、確かに科学はわれわれの生活を便利にはした。しかし、その一方で戦争は効率よく大規模殺戮と、巨大な環境破壊を瞬時に起こすことを可能にした。その代表的なものが原爆で、一瞬にして大量の殺戮をしたばかりでなく、じわじわと長期にわたって責め殺す遅発性の影響(がんや白血病など)を起こすことが明らかになっている。

また、じわじわと次の世代まで殺すものさえ開発された。たとえば、枯葉剤は有機塩素系化合物で、その源泉は1915年の第一次世界大戦中に開発された塩素ガスであった。これを契機に、ホスゲン、クロルアセトン、イペリットガス、ルイサイトなどの毒ガスが開発された。戦後、それら有機塩素系化合物が殺虫剤、殺菌剤、殺鼠剤、枯葉剤、農薬としてDDT、BHC、PCP、HCB、DDVP、ディルドリン、2-4D、2-4-5Tなど、医薬品として、クロロホルム、キノホルム、クロロマイセチン、クロロテトラサイクリンなど、洗浄剤としてトリクロロメタン(クロロホルム)、トリクロロエタン、トリクロロエチレン、塩化トルエン、テトラクロロエチレンなど、容器・包装材として塩化ビニル、塩化ビニリデン、塩化ゴムなど、工業用化学物質などとしてPCB、PCT、塩化エチル、塩化ナフタリン、クレオンなど多種大量の製品が生産された。この中には薬害、公害を起こしたものが少なくない。

日本軍は1929年から大久野島で極秘裏に毒ガスを製造していた。生産量は推定6600トンと言われている。毒ガス工場で働いていた労働者は5000人以上いた。彼らは今なお慢性気管支炎、肺気腫、肺結核などの後遺症と合併症に苦しめられている。呼吸器のがんの死亡者も多い。

ベトナム戦争では1961年から10年間に米軍は7200万リットルという大量の枯葉剤を南ベトナムに散布した。その中にダイオキシ類が550キロ含まれていたという。流産・死亡・先天異常、胎状奇胎、がんなどが高率に発生した。

全くの治外法権である軍事基地では、環境基準などなきに等しい。代表的な例として

フィリピンの旧クラーク基地周辺の汚染問題がある。1991年6月のピナツボ火山爆発による大量の難民が発生した。避難民2万世帯が基地内部に居住し地下水を使用した。2～3年の内にがん、白血病、心臓疾患、肺疾患、腎臓疾患、先天異常、神経疾患などが多発しているとして問題になった。基地内の浅井戸は重金属(水銀、鉛、カドミウムなど)やPCBなど有機塩素系の化学物質、硝酸塩などで濃厚に汚染されていることが明らかになった。現在の地位協定では環境復元は義務付けられていない。沖縄の問題をもつわが国も他人事ではない。

1990年に入ると劣化ウラン弾が問題になってきた。劣化ウランとは核兵器や原発の産業廃棄物というべきウラン238で半減期は45億年という厄介なものである。これは核の廃棄物で、その処理に困っていた。そこで比重が重いことが注目されて砲弾に利用された。

1991年の湾岸戦争では約95万個の劣化ウラン弾が使用されたという。それは、約320トンの劣化ウランを含むことになる。戦後それはイランの国民とくに小児にがんや白血病を引き起こしている。そればかりか、帰還兵たちも大勢が白血病やがんを発病している。またその子どもたちに先天異常が多発しているという報告もある。湾岸戦争症候群と呼ばれ、25万5100人が治療を受け、8万2000人が補償を受けたと言う。

1995年のボスニア紛争でも同様な現象がみられて、ボスニア症候群と呼ばれている。1999年のコソボ紛争、2003年のイラク戦争では100万発、350トン以上の劣化ウランが飛散していることになるというが、その結果は恐ろしいものである。

地球温暖化、オゾン層の問題も重要だが、今や戦争をやめることが最大の環境保護である。

(2016年4月13日)